

# 宗教超え災害と向き合う

東日本大震災から4年が経過し、災害時における宗教の役割が改めて注目されている。仙台市で今月行われた国連防災世界会議では、宗教の話題が相次いで取り上げられ、被災者の心のケアに当たる「臨床宗教師」の活動や、寺院・教会を避難所に活用する試みなどが報告された。いずれも布教を目的とせず、宗教・宗派の違いを超えて協力し合うことが鍵となっている。

(小野木康雄)

## 「臨床宗教師」脚光

### ■高まる育成機運

「宗教と聞くと、多くの人は『怖い』『利用される』というイメージを持つが、実際はそうではない。宗教者を活用してほしい」  
今月17日、東北大で行われたフォーラムで、臨床宗教師の指導に当たる合山洋三准教授（臨床死生学）はそう呼びかけた。

東北大大学院は震災翌年の平成24年4月、臨床宗教師の養成講座を開設した。仏教やキリスト教の宗教者有志が震災直後、火葬場で身元不明の遺体を供養したことが原点だ。活動は宮城県宗教法人連絡協議会が主体となった「心の相談室」などによる被災者の傾聴へと発展。臨床宗教師を育てる機運が高まった。

東北大大学院ではこれまで91人が修了、約半数が被災地で約3割が医療福祉の場で働く。岐阜県大垣市の病院で終末期医療に携わる浄土真宗本願寺派の僧侶、田中至道さん（26）は「人生の意味や死への恐怖など、宗教者だから聞ける話がある」と強調した。

### ■自治体との協力

世界宗教者平和会議（WC RP）日本委員会などが今月16日に開いた別のフォーラムでは、災害時に宗教施設を避

難所として活用することがテーマとなった。浄土宗寺院、愚鈍院（仙台市）の中村瑞貴住職は、自坊を支援物資の集積所やボランティアの宿泊施設として開放した。一方で宗教施設によ

ては受け入れを信徒に限り、治安への不安から開放しなかった例もあったと指摘。「仙台の宗教施設は避難所として活用されず、公益性を発揮したとはいえない」と述べた。一方、大阪大大学院の稲葉



国連防災世界会議の関連イベントとして開かれたフォーラムで臨床宗教師の活動を紹介する宗教者ら＝17日、仙台市の東北大

### ■世界からも関心

WC RP日本委などのフォーラムでは、2010年のハイチ大地震で被災したピエール・アンドレ・ドマス司教が「宗教者には被災者の努力に寄り添い、希望を与える力がある。異なる宗教が同じ方向に向かうべきだ」と指摘。

2004年のスマトラ沖地震を経験したインドネシアのイスラム組織リーダー、ディン・シャムスディーン氏は「防災や減災を考えると、国際社会は日本から学べる」と語った。

その後、宗教者約1000人は、宮城県名取市の閉上地区を訪問。津波に遭った犠牲者の名を刻んだ慰霊碑前で黙禱し、苦難を癒やすために連帯することを誓い合った。



臨床宗教師 宗教や宗派の違いを超え、被災地や医療現場などの公共空間で人々の悲嘆や苦悩に寄り添う宗教者。布教や宗教勧誘は行わない。東日本大震災を機に、僧侶らを対象にしている。東北大大学院が平成24年度から養成を始めており、龍谷大大学院や鶴見大などがこれに続いた。今年2月末現在の修了者数は東北大大学院で91人、龍谷大大学院で11人。

## 寺院・教会など避難所に活用